



聖ヨセフとわたし

聖ヨセフ年(今年12月8日まで)を記念し、霊名がヨセフの司牧者に聖ヨセフにちなんだものの紹介や個人的な気づきをシェアしていただく。

聖ヨセフに思うこと

私は1963年4月に、本所教会(東京教区)にて、聖ヨセフの霊名で洗礼を授かりました。その後は、大阪教区に移り、御受難修道会の司牧・池田教会にて12年間働きました。その間、イスラエル巡礼に参加することができました。ヨセフ、マリア、イエス様の育った国の風景はこのような所かと実感いたしました。特にエルサレム以南は、完全に砂漠化しています。

ヨセフ、マリア、イエス様の育ったナザレは、エルサレムより北の山岳地寒村です。ヨセフは大工で石出し、石と木材で家を建てたり、また修理の請け負い、男手が必要な仕事はなんでもしていたようです。

ヨセフ、マリア、イエス様の家族は信仰熱心で、毎主日は会堂で祈り、詩編の賛美の祈り、聖書を読み(旧約)、子どもたち(イエスも含み)は、聖書の勉強をしていたようです。『聖書の歴史』、創元社)ヨセフは、村と一家のささえ手だったようです。

私は修道者として、ヨセフの生き方、祈り、働くことを実践しなければと心にします。



くも だ 雲田孝一助祭
(御受難修道会)

『塩狩峠』(三浦綾子著、新潮文庫、1973年、税込737円)



中村克徳神父から
この一冊

司牧者がリレー形式で若者たちに読んでほしい書籍を紹介し、青年たちの読書感想文を掲載する連載。今回は中村克徳神父様(御受難修道会・日生中央教会)が担当。



三浦綾子氏の代表作であるこの物語は、実際に起きた鉄道事故の主人公をモデルにした小説である。著者の豊かな感性に彩られた文章は、彼の生涯をドラマチックに描き出し、読者を物語の中に引き込ませてくれる。

主人公の永野信夫は明治10年に東京で生まれ、父と祖母との三人暮らしであった。彼は祖母の死を契機に死別したはずの母と妹との対面を果たす。母の菊はキリスト者であることを理由に、祖母によつて家を追い出されていたのだった。母から捨てられたという思いは、信夫にキリスト教への反発心を抱かせる。

父が急逝したため、信夫は大学進学を断念し、裁判所で働き始めた。母との関係を修復できずにいた信夫は、友人の吉川の誘いで、北海道の鉄道職員として働くことを決めた。そこには、ひそかに思いを寄せていた吉川の妹ふじこが難病を患

ったことへの気がかりもあったからだ。

札幌移住後に、ふじこがキリスト信者であることを知る。初めて聖書を紐解いた信夫は、イエスの口から出るさまざまな教えに当惑した。聞いたこともない教えが信夫の人生観に大きな揺さぶりをかけたからであった。あるとき路上伝道師と出会い、イエスの教えの深さと愛に気づいた信夫は、転勤先の旭川で教会を訪れ、洗礼を受けた。彼を偽善者だと決めつける同僚の嫌がらせに苦しめられながらも、「汝の敵を愛せよ」というキリストの教えを忠実に生きようとする。

病気が癒されたふじこの結婚が決まり、結納を交わすため札幌に向かう汽車に乗った信夫を悲劇が襲う。塩狩峠を登る最中に、最後尾の車両の連結器が外れたのだ。坂道を逆行する車両を止めなければ、乗客の命の保証はない。重大な選択を迫られた信夫が下し

た決断とは……。

私がこの小説を読んだのは高校一年生であった。宗谷本線で札幌行きの汽車に乗ると、この塩狩峠を通る。車窓から現場を眺めながら、主人公の信仰の強さに心を打たれたのを覚えている。一読を勧めたい一冊である。

次回は、畠基幸神父様(御受難修道会)です。

若者の読書感想文募集

- ① 年齢は35歳まで。カトリック信者もしくはカトリック教会と何らかの関係がある方(カトリック校や諸施設の在籍者又は卒業生、保護者、関係者など)。
- ② 感想は400字程度。氏名、所属、顔写真(自由)を添えてメール(jiho@osaka.catholic.jp)か郵便にて送付(掲載にあたり編集する場合あり)。
- ③ 感想を送ってください。方全員に教区オリジナルしおり(4枚組)を進呈。たくさんの方の投稿を待ちしています。



「信仰の時間」

ABC ラジオ(朝日放送)
毎週日曜日 5:50~6:00AM

8月担当: 和越 敏 神父 (仁川教会)

ともに生きよう!

(22日放送分より)



東京オリンピックは連帯と交わりのうちに終わりました。24日火曜日からパラリンピックが始まります。ご存じのように「オリंपィズム」とは、スポーツによって心身ともに調和のとれた人間を育て、選手たちが4年に一度、世界中から集まり、フェアに競技し、異文化を理解しながら友情をはぐくむことによって、平和な社会を実現しようという考えです。オリンピック・パラリンピックの目標とは、世界中の人びとの人種や文化、宗教、価値観などの多様性を尊重し、世界平和に向けて活躍できる人間を育てることです。共生社会実現に向けての気づき、認識および行動の変容を促す目的があります。

「共生ー共に生きる」についてですが、キリスト教には「共生性」と

いう特別なたまものがあります。主イエス・キリストは、私たちと喜びと悲しみを共に分かち合うためにこの世に来られました。主は、特に食事の時間、夕食の時間を選んで、ご自分の霊的なあかしを弟子たちに託し、真理と永遠の愛を育み、救いをもたらす食べ物と飲み物として、ご自分のからだと血を与えたのです。私たち一人ひとはミサを通して、「共に生きる」体験をしています。ミサと一緒にささげることによって、自らのうちに閉じこもろうとする誘惑を退け、愛と忠実のうちに強められ、キリストのみ心に従って兄弟姉妹愛を広めるのです。

さて、今の自分の家族・共同体の現状を振り返ってみましょう。食卓を囲んで、食べものだけでなく、愛情、話、行事を共にしています

か? コロナ禍の中で人種差別、外国人嫌いはありませんか? 周りに置き去りにされている人はいませんか? めったに食事を一緒にしなかったり、互いに話をするよりもテレビを見たり、スマートフォンやゲームなどで遊んだりしている家族は「100%家族」と言えるのでしょうか? それは寄宿舎のようなものでしょう。

今日、多くの社会的要因により、家庭の共生性が妨げられています。構成員として、一人ひとりが家庭の共生性を取り戻す方法を見つけなければなりません。一つの方法としては食卓を囲み、互いに話し合い、耳を傾け合うことです。利己主義を捨て、自分のことやテレビ、コンピューターのことばかり考えるのではなく、共に生きるためには会話が必要です。分かち合い、支え合わなければならないでしょう。

そうやって、私たちは誰も置き去りにせずに、調和と平和を、すべての人と共に生きることを目指していかなければなりません。それを目指すのであれば、怒り、嫉妬ではなく、平安な心で微笑み、まず自分の目、手、声の届く範囲の身近な人たちと

連携していかなければなりません。私たちは、あたたかい心をもって、すべての人のいのちを大切にしながら、いかなる偏見や差別も排除しながら、誰もがその人らしく暮らすことが出来る地域社会を実現しなければなりません。

私たちは、自分がやるべきことを認識した上で「感謝の祭儀の神秘」に目を向けなければならないでしょう。主はすべての人のためにご自分のからだを裂き、ご自分の血を注ぎます。この交わりのいけにえに対抗できる分裂などありません。キリスト者の家族の生き生きとした力強いきずなは、日々の苦労や喜びに先行してそれらを支え、もてなしのダイナミズムの中にそれらを受け入れます。これはミサの恵みのうちに働きます。ミサは、受容し救う力をもって、交わりを新たにすることが出来るのです。また、キリスト者の家族は見捨てられた人、排除された人を受け入れ、守り、共生することができます。

すべての家族・共同体の共生性をこれからも育てていけるよう、心を合わせて祈りましょう。感謝と賛美のうちに!